長光寺だより
第19号
玉寶山 長光寺

〒169-0073
東京都新宿区百人町1-5-2
TEL:03-3209-5360
FAX:03-3200-7026
http://www.chokoji.net/

長光寺の北にある厄除け北向き観音です

観音とは汝が異名なり

住職　松倉太鋭

この言葉は江戸期に活躍した天桂伝尊という禅者の言葉です。観音さまと言えば通常思い出されるのは本堂の内や外におられる観音さまです。慈悲を体としていますので、やさしい面持で拝む人を見つめます。しかし、本当の観音さまはそれこそ外にあるのではなく、自分自身にあります。

観音経には

どんな火の中であっても、観音さまは救ってくださる。
どんな水の中であっておぼれても、救ってくださる。
盗賊に会って危険にさらされても救ってくださる。

読みようによっては、なんとも自分勝手な現世利益的なお経に思われがちです。しかし、それが観音さまの心の現われです。わが子が火の中にあれば助けたい。わが子が水の中でおぼれたら救いたい。そんな親の慈悲のような心が観音さまの心です。

この度の東北の大震災にあたっても日本中の人たちが、みんなで被災地のことを思い、何か自分たちで出来ることをという気持ちで、ボランティアをしたことも観音さまの心です。

私たちはせっかく持って生まれたこの心を自分たちの様々な妄想で覆い隠してしまっています。

本来の自分（観音の心）とは天地いっぱい、大いなるいのち、仏のいのち、そのものと申せます。私たちは仏の御（おん）いのちに生まれ、いのちの中で生き、このいのちの中で息をひきとります。この御いのちというと抽象的になりますが、大自然という言葉に置き換えても良いと存じます。大自然の中で生まれ、その恵みをいただいて生きる。これがいのちの事実です。

太陽の光、空気、風、大地、庭の草花、周りの家族、私たちはこの大自然のほんの一部です。だから謙虚に生きたいものです。

長光寺の歴史

長光寺の歴史はいままで研究したり、調査されることもありませんでした。そんな中『文政寺社書上』という江戸時代の幕府の公文書が見つかったことは、前回述べましたが、非常に幸運のことでした。

この古文書が記録する文政（一八一八～一八二四）の時代は、徳川慶喜が「大政奉還」をしたのが一八六七年でありますので、明治の時代の足音が微かに聞こえる時代です。寺社奉行所の公式記録ですので、幕府の官僚たちは時代に関係なく仕事に精励していたのでしょう。

前回は開基さんのことを述べましたが、今回は釣鐘のことが記録されていますのでこれを取り上げます。『書上』文中には次の記録が記載されています。

「開山予住院之後闕華鯨為恨茲信檀内田氏夫妻発起施心首募之遂勧衆助功成矣」

お寺を開いた住職が着任してみたら、大事な寺の鐘（華鯨）が無いことに気づき、これを知った信檀（檀家）の内田氏夫妻が発願して周りの人たちに賛同者を募り、これを完遂成就したとあります。記録によると元禄十一年という年号が釣鐘に刻まれていたようです。この釣鐘は大きなもので本堂の軒に吊り下げられていましたが、残念ながら現存しておりません。途中の火災で失くしたのか、あるいは戦時中に金属類として供出したのか、記録が無く定かでありません。

ただ、残されている戦前の本堂の写真にはこの釣鐘が写っておりません。なぜ写真で判るかというと、これはお寺の規則により、釣鐘は本堂の西側に吊るすことになっているからです。記念すべき鐘が戦前の写真にはありません。

この原因として火災による焼失がまず一番に考えられます。金属なので焼失ということはありませんが、そもそも釣鐘は鋳物製でありますので、火を被ると音が出なくなってしまったのではないかと推察します。

よく戦前の建物を知る古老の方のお話では、長光寺の本堂と庫裡とを結ぶ橋のような渡り廊下が掛かっていたと述懐されています。これは古来の寺院建築で見られることですが、「俗」から「聖」にわたる意味の〝渡り廊下〟があり、現代でも古い寺社に行けば見うけられるものです。

長光寺は平成十三年四月に皆様のご協力で本堂が完成いたしました。これを機に釣鐘と鐘楼を併せて建立したい、という気持ちも自然にわいてきます。しかしながらこの街中で鐘をつくということは、近隣の住民には騒音として聞こえるようで歓迎されません。でも法要には殿鐘といって法要開始の合図が必要です。

『書上』の文中に記録されているお檀家の内田氏はご夫婦でよくお参りになります。早速にこの記録の書面を見ていただき、本堂完成記念にご協力いただけないでしょうか、とお願いしましたところ、内田家のご当主は快く承諾して下さり、鐘を本堂に吊るすことができました。考えてみると本堂の完成と古文書の発見、内田氏との出会いという不思議な巡り合わせの縁でありました。

木犀の香り

猛暑という言葉がありますが、最近の暑さは耐え難いもので、熱中症で倒れた方も老若男女を問わず、厳しいものでした。それも彼岸が過ぎると影をひそめるようになりました。

長光寺本堂横にある木犀の老木は、今年の暑さに負けたのか、季節が来ても金色の実が付かず、良い香りを発しません。

『永平開山行状建撕記』という書物には、京の都を遠く離れた深山の永平寺で生活する宗祖のために、京都から木犀の木を弟子たちが運んで移植したという記述があります。この木犀の樹は曹洞宗のお寺には必ず植えられているようです。

また、最近は街路樹に木犀が多く植えられています。秋の一時期は生活の臭いが消え、木犀の香りが漂うようになりました。日頃は目立たない樹ですが、秋になるとその存在を改めて見直します。

『大般若経』と玄奘三蔵

玄奘三蔵（六〇二～六六四）は中国（唐）の時代の祖師です。当時伝えられていた仏典が完全なもので無いことを知り、正しい経典を学び、伝えるために六二九年国（唐）の国禁を犯して出国しました。

インドに行くにはチベットを通り、世界の屋根と謂われるヒマラヤ山脈を越えることが一番近道です。しかし、当時は高い雪山を越える術や地図さえもありません。そうなると当然徒歩や馬に乗って砂漠や高地を踏破しなければなりません。旅の途中では牢に繋がれたり、盗賊に襲われたり、何度も窮地を経験して、西に進み、今のバクトラ、バーミヤン、カピシー、ガンダーラを通り、三年がかりでインドに到着して、ナーランダー寺で瑜伽師地論（ゆがしじろん）（奈良仏教の法相宗に伝えた教え）や、その他のことを学びました。

後にお釈迦さまの遺跡があるインド各地を歴遊して、六四五年に仏舎利・仏像・経巻など六五七部を運ぶ二十頭の馬を連ねて長安に帰りました。

それから膨大な経巻を翻訳する事業に着手してこれを成し遂げ、インド旅行記である『大唐西域記』を著しました。この書が後に『西遊記』となって孫悟空や猪八戒・沙悟浄を伴い、さまざまな妖魔の障碍を排してインドに至るという物語を生みました。

今回、皆様にご協力いただいた『大般若経六百巻』は六六〇年から四年をかけて訳出したもので、玄奘三蔵はこのお経を鎮護国家の妙典として国の大宝といたしました。これが奈良時代に日本に伝えられ、多数の経典は講説されるよりも、むしろ災難よけに受持安置されてきました。「色即是空、空即是色」の教えで知られている、諸法皆空の思想がこの中に盛られています。

長光寺でも空襲で焼失してより、この度、六十八年余の歳月をかけてこの経巻を安置することができました。

今後は『大般若経』を本堂に安置して皆様の家内安全、諸災消除、心願成就、各家先祖諸霊供養して、正月の祈祷や様々な行事に、有り難い経巻を活用したいと存じます。

大般若祈祷会の開催について

皆様方のご協力によりまして『大般若経六百巻』が奉納されました。

これによりやっと戦災で焼失した経巻が新添され、長光寺も祈願や祈祷ができる寺となりました。皆様のご協力の賜物です。有難うございました。

これからは本尊さまのところにこの経巻を奉納いたします。

なお、『大般若経六百巻転読』の法要は五月二十三日のお施食会法要の時に併せて行いますので、檀信徒の皆様にはこの法要には是非ご参加下さい。

新年祈祷会のお知らせ

新年の祈祷は一月元旦から三日まで早朝五時より行ないます。この祈祷のお札は一月のお参りの方に差し上げます。（元旦祈祷は古来より早朝に行うことになっております）

墓地の参道が完成いたしました

いままでの参道は戦前のコンクリート製のもので、年代が過ぎていますので、ところどころに補修の跡がありました。せっかくの戦前からのものですが、段差があって高齢の方などつまずいてしまったり、車いすでスムーズに通行ができない難点もありました。そこで、墓地の工事も一段落したので、滑り止めをしたみかげ石を敷いて参道を新覆工事いたしました。

皆様には大般若経や總持寺のご寄附をお願い致しましたので、宗教法人としても自助努力をしなければなりません。この工事費は長光寺会計より拠出いたしました。また、次回は東側の参道の追加工事も行いたいと存じます。

会計報告について

皆様の浄財を早速大本山総持寺に納付いたしました。左記のとおり八十四万余です。本山が二つあるという曹洞宗の特殊な事情が反映して、總持寺は馴染みがないという意見のお方もおられました。皆様のご協力に感謝いたします。

なお、大般若の寄付金につきましては全部が完了した時点で、総代さんや皆様方に会計報告をさせていただきます。

領納証　No. 2949

長光寺様

金 842,400 圓

但　大遠忌標準志納香資金として領納いたしました

平成25年8月5日

大本山總持寺大遠忌局

〒230-8686 横浜市鶴見区鶴見2-1-1

長光寺よりお知らせ

墓地の奥の水屋の水は夏でも水道が使えます

参道の敷石工事の時に水道管を参道の下に敷設いたしました。夏でも冷たい水道水が出ますのでお使いください。

カラスが悪戯をします

墓地でカラスが花をちぎったり、湯呑み茶碗を下に落として割ることを見かけます。困ったことですが、ネコの糞と同様に対応には苦慮しています。

付け届けには名前を書いて下さい

墓地の管理料を届けていただいておりますが、肝心の名前が書いていないことがあります。台帳に記録いたしますので面倒でもフルネームでお願い致します。

平成25年10月9日▶
徳允禅兄祖山乞暇記念

平成25年御征忌祖山法堂侍真寮（前列左から3人目）

春夏秋冬　永平寺だより

長光寺の徒弟松倉徳允は大本山永平寺へ上山してより三年目となりました。十月まで宗祖の廟所の侍真寮という場所で寮長となり、九月二十九日の宗祖の大法要が行われ、これを無事に済ませたので、長光寺に帰ることになりました。学校を卒業し、多感な時代に七百年来変わらない生活を経験できましたことは、これからの人生の貫く背骨ができたのではないかと存じます。

これから住職を補佐して寺の運営にあたりますが、これからも研鑽を積みますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

永平寺での修行を終えて

皆様お久しぶりです。徳允で御座います。

平成二十五年十月に、永平寺での修行を終えて長光寺に帰って参りました。時間が経つのは早く、私が永平寺に上山してから三年もの月日が流れました。新宿は相変わらずの喧騒で、長い間山の奥で暮らしていた為に目を回してしまいそうです。

永平寺では今までに経験した事のないものばかりで戸惑いもございましたが、仲間や応援してくれた皆様に支えられ怪我することなく、無事修行をやり通す事ができました。今までも仏教を知識として学んでおりましたが、実際に本物の修行を体験すると、感じるものや、得られるものがまったく違ってきます。永平寺で新しいことを学ぶ度に、自分の中の修行のあり方を考え直す日々でした。机の上で学ぶだけでは得られない素晴らしい体験をすることができ、とても充実した毎日を送ることができました。永平寺での修行は終わりましたが、今度はこの長光寺で更なる修行を続け、より一層精進をしていきたいと思います。

長光寺　松倉　徳允

お正月の心構え

禅心寺住職　金子眞介

元旦は歳の改まりであると同時に人の心も改まるべき時でもあります。過去のあの仕来りや儀式や訓辞は、改歳と同時に心もまた改めて一年の出発の覚悟を促す為にとても意味ある行事だったと思われます。

しかし、現代の日本人にも先人達から伝承した元旦の行事があります。それは寺社への初詣です。報道される数から見れば、むしろ先人達以上に実践してるとさえ言えるでしょう。やはり人は暦の上の改まりを機に心改まりたいと願い、すすんで儀式を取り入れるものと思われます。

修正会

そこで大切な事は初詣にこめる思いです。

それは家内安全・無病息災・学業成就等々あるでしょうが、改歳に最も相応しい思いは、過ぎ去った一年やこれまでの人生に残る自分の足跡を仏の教えに照らして振り返り、より良い生き方を実践しようと誓うことです。

新年の三ヶ日、お寺では大般若会の法要が営まれます。その法要を「修正会」とも言います。「修正」とは「正月修法」の略ですが、改歳にあたり仏の智慧（般若）をいただき、心安らかに生きることを願う法要です。

修正会の要点

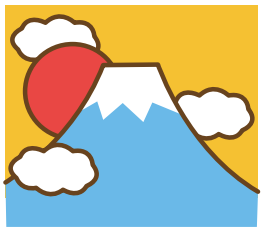
では仏の智慧に照らして心安らかに生きることを願うとはどのようなことを指すのでしょうか。それは、尊い生き方をするということです。その為には先ず、人間らしさ、人間の特性を再認識し、それを暮らしに最大限いかさねばなりません。諸生物の中で人間だけに具わる特性は長短合わせ数々ありますが、中でも善悪・使命・無常の認識が代表的といえます。

したがって、尊く暮らすとは、悪を作さず善を作し、世の中における我が使命を自覚し、無常の理を肝に銘じて時々日々の諸事にあたることです。

初一念をわすれるな

この三つの要点中、うっかりしがちなのが三番の無常の理です。無常とは「常無し」ですから、万物は河の流れのように流転しているということです。私達の身体も命も幸不幸も勿論無常です。「延命を祈る間も減る命」と言いますが、先ずは無常の理を正しく会得し、善悪の使命の自覚という智慧を以って諸事にあたることが、秘訣といえるでしょう。

幸いにして仏の教えに照らして改まり、心に刻んだ元旦の初一念を忘れることなく、新たな一歩一歩を踏み添えて行きたいものです。



編集後記

◆「ヘイトスピーチ」について

特定の民族や人種を汚い言葉でのしる。「ヘイトスピーチ（憎悪表現）」がいま話題となっています。韓流ショップが軒を連ねる百人町でも、一時は毎週日曜日になると数百人のデモが繰りひろげられました。そのつど機動隊が大勢出動してデモの周辺を警備するものものしさ。というのは反韓の言葉を連呼する民族団体のデモであるからです。しかしその一方でお互い両国は仲良くしようと呼びかける団体のデモも行われています。

韓流の町として知られる大久保で、昨年二月九日に最初の反韓のデモがありました。右翼の街宣車のこれに輪をかけるような活動も加わり、一時は喧噪の町になってしまいました。新大久保駅に降り立つ韓流ファンの女性たちもこれらを傍観していますが、どちらにせよ日本は和を重んじ礼儀正しく謙虚な国民として、これに対処して行かなければならないと存じます。